

## 短い軍隊生活を思う

福島県 小川 春雄

私は大正十四（一九二五）年二月、喜多方町高富町で生まれ、昭和十四（一九三九）年三月、喜多方尋常高等小学校高等科二年を卒業しました。

入隊前の家族は姉が五人、兄一人、弟一人、妹二人の十人の大家族でした。昭和十五年には時の厚生大臣より全員健康で表彰されました。当時、出征家族の家の玄関には、出征家族の証の「証紙」が貼られていました。

母は会津藩の下級武士の娘でしたが、厳しい人で、こんなに子供が沢山いてもお国のためにならず申し訳がない、といつも嘆いていました。このような母の思いをくみ取り、私は十七歳の時に海軍を志願しましたが、近視と右手人差し指の欠陥で不合格となりました。

この指の欠陥とは十五歳の時、軍需工場で、フ

ライス盤で人差し指の第一関節を切断するという事故に遭ったためでした。

一緒に志願した友人は、昭和十九年、ソロモン沖の海戦で戦死しました。私もあのととき合格していましたが、同じ運命だったかも知れません。

私は成長する過程で、小学校入学時には満州事変、六年生の時には日支事変が始まり、小学校高等科を卒業して社会人となってからは大東亜戦争となり、幼少の時から一貫して軍国主義の真つただ中で生活し、成長してきたことになります。

昭和十四年三月、高等科を卒業すると、すぐに東京市向島区にあった金子金属器工業(株)に就職しました。この会社は当時の軍需工場で、主に小銃の弾の製造をしていました。昭和十六年一月に兄が骨膜炎で二十歳の若さで亡くなりまして、私は家に帰り、地元の岩瀬ポンプ製作所に入社しました。

ここも軍の指定工場で、日本特殊工業に納入する手動式のウイングポンプを製作していました。

このポンプは中国戦線ではクリークの水を飲料水に濾過する装置として大変役に立った道具のようでした。

昭和十九年五月、徴兵検査を受けました。この年は数え年二十歳と満二十歳の両年の者が受けることになりました。徴兵検査の結果は第一乙種合格で、昭和二十年二月二十一日、入隊通知書が郵送されてきて、二月二十六日までに郡山駅前に集合せよとのことでした。現役入隊なのに僅かの日数しかなく、慌てて準備したのを覚えています。

喜多方駅から出たのは七人でした。学年の一級下の者が五人、同級生が一人で、同級の彼は体操の選手で、全国中学校神宮大会で入賞した名手だったのですが、北支で終戦間際になって戦死しました。

集合場所の郡山駅前広場は、入隊する若者でいっぱいでした。引率の下士官が見えられ、千葉県市川国府台の東部第七十三部隊「野戦重砲留守部隊」に入隊となり、私物は家に送るように荷造り

をして、代って軍服を受領し、戸惑いながらも着替えたのを、六十年過ぎし今日でも、あの緊張感と共に思い出されます。

兵舎に入って、内務班の一班は十五人ほどだったと思いますが、班長、班付上等兵を紹介され、「お前たちは、行く先が分るまではお客様だから」と言われて、その気になっていきますと、突然、「整列！」の命令が下り「お前ら、ここは娑婆ではないんだ」と、まだ若い班付の上等兵に猛烈なびんたをもらい、これが軍隊のびんたなのかと驚きました。

そして真鍮しんちゅうの認識票を渡され、これは個人の分身だから大事にするようにと言われ、また封筒を渡されて、「この中に遺書、毛髪、瓜を同封し、これは、この留守部隊に保管しておくので戦死したならこれが残るから心配なく軍務に励むように」との訓示がありました。

日本を離れて

昭和二十年三月十日、東京の下町は、B 29の物

凄い空襲でした。いわゆる東京大空襲です。その翌日の夜半、市川駅より列車の窓には鎧戸を下して博多まで行き、港の近くの映画館のような場所まで一泊し、翌朝、博多港より乗船、釜山に向い出航しました。生来、乗り物には弱いものですので、食事が出来ず、ふらふらの状態でした。

釜山からは有蓋貨車にて満州に入りました。三月中旬ですが、まだ寒かったです。小用をすると、その飛沫が凍付く寒さで、なるべく水分をとらずに我慢したものです。また貨車の扉が重く開閉には大変でした。満州を過ぎ山海関に入りますと、引率の下士官から「これからが戦場なのだ」と告げられ、一層の緊張がみなぎりました。

南京に着くと、ここにて部隊編成が行われ、私は独立警備歩兵第四十三大隊に配属になり、山東省張店の部隊本部まで戻りました。

(独立警備歩兵第四十三大隊は第九独立警備隊に属する第四十三〜第四十八大隊の六大隊の一つで、支那派遣軍。第四十三軍の隷下部隊として、

北支に駐屯して該地区の警備、治安維持に対処していた部隊である。部隊符号は「至剛」で、第四十三大隊は「至剛第一五七〇四部隊」と呼称された。第九独立警備隊司令部は山東省歴城県済南にあり、ここで警備及び訓練を行っていた)

張店は炭坑の街です。私は第一中隊に編入され、ここで初年兵の教育を受けたのですが、一期検閲の途中で、人事係の准尉殿に呼ばれ、「お前は、指に欠陥があるから歩兵ではなく、衛生兵にならないか」と告げられ、済南の兵站病院にて衛生兵教育を受けることとなりました。当時戦況が厳しくなり、通常三カ月のところが二カ月の短縮教育でした。

ここでは人体の構造から看護学まで、短い期間でしたが厳しい教育を受けました。そして無事、この教育を修了して部隊本部の医務室勤務を命ぜられました。

(実際には第九独立警備隊の任務は、山東省青州特別行政区及びこれに隣接する諸県を警備担当

地区とし、特に膠済鉄道及びその支線約百五十キロの警備と軍需資源、諸重要施設の確保と警備、警戒、掩護を任務としていた。

部隊日誌を見ると、昭和二十年五月には、秀麗第一号作戦、六月には至剛第一号作戦に参加し、八路軍の攻勢の緊迫に対処した警備、討伐を実施している。七月には、状況の変化に対処して兵力を張店に集結、在留民約七千人の保護と張店の確保に従事していた。

部隊の編成には、兵器など現地製作品や鹵獲兵器などが混在していたようで、我々に与えられた装備は、地下足袋、銃は騎兵銃が五人に一丁、弾薬も乏しく、帯剣はあっても鞘は木製という有様でした。

部隊は前述のように地域の警備、治安維持に従事しており、私は衛生兵として本部勤務で、兵站病院も負傷兵は少なく、比較的楽な勤務でした。

八月十五日は暑い天気の良い日でした。突然、非常召集が発令され、「全員完全装備にて広場に

集結するように」とのことでした。何かあったのかと、思っていました。

部隊長より「これより天皇陛下の玉音放送がありますから良く聞くように」と言われ、雑音が多く、よく聞き取れませんでした。部隊長よりは「無念ではあるが、日本帝国は戦争に敗れた」との訓示がありました。

軍務に付いてからまだ日の浅い我々初年兵は、復員して、故郷に帰国できるんだと嬉しく思っていました。長い年月を戦地で苦勞して来た古年次兵の方々は、これからどうなることかとやけになって、チャンチューウを飲んで、怪気炎を上げる人もいました。

終戦後は済南で武装解除になり、昭和二十一年三月十五日、山東省青島より米軍LSTに乗船、佐世保に上陸、復員しました。

六十二年前の二十歳の一年間はなんだったのか、夢のようです。二十歳の若さで亡くなられた友人のご冥福を、衷心より祈っている毎日です。